

第34回 日本動物児童文学賞審査委員会の会議概要

I 日 時 令和4年8月8日（月）10：00～12：00

II 場 所 オンライン開催

III 出席者

【委員】

動物福祉・愛護部会長

佐伯 潤 公益社団法人日本獣医師会理事（動物福祉・愛護部会長）

動物福祉・愛護関係省庁及び教育関係省庁関係者

野村 環 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長

藤枝 秀樹 文部科学省初等中等教育局視学官

動物福祉・愛護関係学識経験者

安部 正弘 公益社団法人日本愛玩動物協会副会長

(欠席) 田畑 直樹 公益財団法人日本動物愛護協会理事長

成島 悦雄 井の頭自然文化園元園長

公益社団法人日本動物園水族館協会元専務理事

浅利 昌男 公益社団法人日本動物福祉協会顧問

【日本獣医師会】

境 政人 公益社団法人日本獣医師会副会長兼専務理事

IV 議 事

- 1 委員長の選任（協議）
- 2 第二次審査に至るまでの審査経過等（説明）
- 3 審査（協議）

V 会議概要

冒頭の挨拶として、境副会長兼専務理事から、本年11月に開催されるFAVA大会と併せて令和4年度獣医学術学会年次大会を開催するにあたり、多くの国内外の参加者を期待していること、本年6月1日に施行されたマイクロチップの販売用犬猫装着登録義務化について、本会のAIP0事業の運営を法定登録事務とうまく融合させていくべく現在見直しを進めていること、本年5月1日に施行された愛玩動物看護師法について、多くの方が愛玩動物看護師の免許を取得されて、獣医師とともに高度チーム獣医療提供が可能になることを期待していること等が述べられ、各委員に対し、ご多忙の中、第二次審査にご協力いただいたことへの感謝が述べられた。

1 委員長の選任

事務局から委員長選任について説明後、委員の互選により、佐伯委員が委員長に選任された。

2 第二次審査に至るまでの審査経過等（説明）

事務局から、資料に基づき、作品募集から、応募状況、第一次審査、第二次審査に至るまでの審査経過等について説明された。昨年度に引き続き、本年度も、一般社団法人日本児童文芸家協会と第一次審査の業務について委託契約を結び、同協会の常務理事である金治直美氏を委員長、横田明子氏を副委員長とした有識者 18 名で第一次審査委員会を設置し、応募された 96 作品の中から 15 作品を第二次審査候補作品として選出した旨報告された。なお、応募された 96 作品のうち、原稿の枚数が規定に達していない 4 作品及び原稿の枚数が規定以上の 2 作品の計 6 作品が、有効応募作品対象外とされた旨報告された。

3 審査（協議）

各審査委員による審査候補作品の事前審査結果をもとに、協議の結果、別紙のとおり大賞 1 作品、優秀賞 2 作品、奨励賞 5 作品が選定された。

4 まとめ

- (1) 大賞、優秀賞受賞者の表彰は、令和 4 年 9 月 24 日（土）に台東区生涯学習センターミレニアムホールにて開催される令和 4 年度動物愛護週間中央行事屋内行事の会場において行う予定（※）。
- (2) 大賞及び優秀賞の 3 作品は、「第 34 回日本動物児童文学賞受賞作品集」として製本のうえ、都道府県等の関係機関、小学校等の教育機関及び図書館等に配布する。

※令和 4 年度動物愛護週間中央行事屋内行事については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、今後の状況により、開催方法の変更（オンライン配信など）の可能性はある。

第 34 回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「モモとタロウ」

寺田 喜平（岡山県）

<受賞理由>

家業である牛飼いを通して、畜産動物と向き合う家族の心の動きとそれを通して成長する兄妹の成長の姿が描かれた作品。「牛飼い」という、いずれは食用となる命と真剣に向き合う姿が読者の心をつかみ、牛飼いについて、観念ではなく、実体験に基づいていると思わせるリアリティがある作品である。牛の飼育や子牛の誕生を通して命の大切さや動物の命をいただいて生きる人間について考えさせられ、畜産農家の大変さや食のありがたさを知るきっかけになり得る作品である。はじめのうちは牛飼いの仕事を嫌っていた兄妹が、牛飼いとしてのさまざまな出来事を通して、兄は祖父や父と同じ牛飼いに、妹は動物の命を大切にす獣医師になろうという決意に至る過程が自然に描かれ、人と動物の関係を子どもたちにもしっかりと伝える作品である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「堤防の道の散歩」

竹内 佐永子（愛知県）

<受賞理由>

両親の離婚により引っ越したばかりで友達がない小学四年生の少女が、唯一の気分転換である川の堤防の道の散歩をしていたある日、キジの夫婦を見つけて興味を持ち始めたことから鳥への興味が広がり、そのことがきっかけでクラスメイトと少しずつ仲良くなっていく。両親の離婚という複雑な家庭環境と、引っ越したばかりで周りに馴染めない主人公の心情の変化が鳥に対する関心や知識の高まりに絡めて自然に、かつ丁寧に描かれており、複雑な家庭環境で育つ主人公を通して、様々な環境の中で暮らしてゆく多様性を示すとともに、読み手である子どもたちに、鳥のさまざまな子育て、家族像を通して、自らを見つめる機会を与えるきっかけになり得る作品となっている。少女の気持ちを描くリアリズムと、話の間に挟まるキジの夫婦の擬人化が無理なく物語を成り立たせ、少女とキジによる交互の異なる視線からの描写が、物語をユニークに展開させている。自然保護の観点と、堤防の工事という防災対策の観点との兼ね合いの中で、動物との共生を考えるきっかけになり得る作品である。

「岬の野生馬」

小俣 麦穂（長野県）

＜受賞理由＞

宮崎県南部の都井岬に生息する日本在来馬の一種である御崎馬。この野生馬を通じて、野生馬の特性や人間の管理の関わり方の難しさをリアルに描いている作品。生まれてすぐに死にそうになっている子ウマの「ナイ」を人間が手助けすることによって、その後のナイの野生馬としての生き方に大きな影響を与えてしまうという、実存する野生馬に着想を得て生み出されたドキュメンタリータッチの作品。大自然の中で営まれる野生馬の生態が生き生きと描かれており、野生馬の生態が良く理解できる作品である。また、野生馬に人間が関与していくことによる影響が、物語に深い奥行きを与えて、野生馬の管理の難しさが上手くまとめられており、野生馬と人間との関わり方を丁寧に描いた作品である。

【日本動物児童文学奨励賞】

「タレンとヨーサン二匹の猫のものがたり」

尾崎 順子（兵庫県）

＜受賞理由＞

二匹の捨てられた猫が、一匹は野生の猫として逞しく、もう一匹は飼い猫として穏やかに、それぞれ境遇の異なる環境の中で成長し、それぞれの道をそれぞれが満足する生き方を選択しながら猫らしく生きていく姿を描いた作品。生い立ちの異なる二匹の猫が、それぞれに猫らしく生きることを選択する描写が、子どもたちの主体性や豊かな感性を育てる可能性を感じる作品。一方、物語の中には自然保護問題、野生鳥獣問題、捨て猫問題、認知症問題などが盛り込まれており、さまざまな社会問題について無理なく考えさせられる作品でもある。

「香菜子の決心」

井上 理博（神奈川県）

＜受賞理由＞

譲渡会で出会った盲目の老犬を飼うまでの、過去の辛い経験からくる家族との葛藤を描きながら、動物福祉と愛護を背景に、犬の譲渡活動、終生飼養、命の大切さ、人と動物のふれあいという課題を通し、それらについて考えさせることを読みやすい文体でまとめられた作品。保護犬を迎える母と子の心情の描写が読み手の心を惹きつけ、老犬の認知症と人の認知症とを絡めて高齢犬を最後までしっかりと面倒を見ることの大変さや大切さが丁寧に描かれており、犬を飼うことの意味を家族で追求していく展開が、読み応えを感じさせる作品である。

「手のひらの命」

伊東 葎花（茨城県）

＜受賞理由＞

生き物が苦手な主人公が、とあるきっかけからハムスターを飼うことになり、ハムスターの飼育を通して家族が成長していく物語。ハムスターの特性がよく描かれており、ハムスターの飼育を適正に行う姿勢がしっかりと伝わり、動物との絆と命の大切さがよく表現されている。ハムスターの飼育を通して起こる事件を通して、複雑な家庭環境から生じていた家族関係が少しずつ改善され、小さな命を通して命の大切さを知ることによって家族が成長していく姿が描かれている心あたたまる作品である。

「おかえりナイア」

堀部 明美（奈良県）

＜受賞理由＞

能登半島に住む少年「かい」は、ある夏の日の朝、おじいちゃんと海岸を散歩しているときに子イルカを見つけ、命の危機を救う。数日の後、ぱったりとイルカを見なくなり、心配になって子イルカの夢を見る。翌年、大好きなおじいちゃんが他界し、悲しみに沈んでいるかいは、弱っている子犬を助けることで、限りある命の大切さを感じ、自分も元気になっていく。

主人公が出会ったイルカ、飼い始めた犬、おじいちゃんとの別れを通して、命と生きることの意味のしっかりととらえていく姿が深く描かれている作品。野生動物と人間との関わり、野生動物保護と自然環境保全の大切さがよく描かれている作品である。

「金魚のあかちゃん」

まきうちれいみ（東京都）

＜受賞理由＞

小学三年生の「まお」は、夏祭りでは金魚すくいをし、金魚を飼うことになり、一生懸命金魚の世話をする。翌年、妹と行った夏まつりで、金魚の友達を作ってあげたいという思いから、再び金魚すくいをして新しい金魚を持ち帰るが、新しい金魚が病気を持っていたために、最初に飼っていた金魚が死んでしまう。

金魚の飼育を通して、生き物を飼うことへの責任をしっかりと伝えようとする意図が感じられ、命について考えさせられる作品。金魚の適正な飼育の理解不足から生じた、「金魚を死なせてしまった」経験から、生き物を飼うことは楽しさもあるが、飼うときには、その生き物の特性をあらかじめ学習して適正に飼育することの大切さを教えてくれる作品である。